

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
第一節	自然への畏敬と感謝を抱けるまち	(1) 謙虚さのもとで自然と関わり続ける	<第3回審議会(12/10)> 【堀場委員】 - やはり京都は本当に風情があって何とも言えない魅力があると感じる。しかし、長く京都に住んでいるとその魅力が分からない。だから、この何とも言えない魅力をどう引き継いでいくかということは、日本にとっても非常に大切だと思う。 【宗田会長】 - 自然とどう対峙するのか、どう関係を持つのかという大きなポイントを見直す機会が来ている。 - 都心の文化だけが尊いわけではなく、その京都の洛外の周辺の自然や農業などにも京都らしさがある。「田舎に京あり、京に田舎あり」という言い方をする。 <第4回審議会(2/3)> 【貫名委員】 - 次の時代を考えると、今の京都は山も含んでいて、農地・林地が日本の平均よりも高い割合で存在している。(中略) 人と自然とあるが、それはあくまで都会の人のイメージで、普段山に入っている私のような者からすると、その間をつなぐもの、農地・林地や農林漁業という部分が抜けていて、都市の住民と自然とあまりに両極である。 <第5回審議会(3/19)> 【濱崎委員】 - 自然に感謝の気持ちがあふれてくるようなまちが良いのではないかと発言した。それからもう一歩進んで、ちゃんと言葉が出ること、行動につながるところまで考えるべきではないか。目の前には見えないが、その向こうにあるものを想像できるからこそその言葉であり、例えば、そういった言葉にして出すというような具体的な行動を起こすための仕掛けが必要。 【貫名委員】 - 京都市の自然は「二次的自然(セカンダリーネイチャー)」、すなわち、手付かずの大自然ではなく人が継続して関わってきたことで生まれた自然である。そこで、それをどう受け継いでいくのかという部分に答えるのであれば、一つ言えるのは、それといかに関与するかに尽きると思う。触らないままの自然ではなく、そことの相互関係の下で生活や文化ができていくというところに終着する。 【宗田会長】 - インバウンドがだんだん増えてくると、「この庭はこういう人が守っているのだな」と、むしろ日本人よりも先に気付くような方も出てくる。工芸品の複雑さ、緻密さ、美意識や、庭のきれいさ、建物の手入れの仕方など、気付くことで敬意を持ってもらえる。そこからマナーを守りつつ、できれば京都の文化に関わっていくことにつながる。興味関心から始まり、より深いコミットを引き出す力が京都にはある。そのメカニズムがまち柄の根底にある。それはもちろん文化の力であり、自然に感謝すること。
		(2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る	<第3回審議会(12/10)> 【鈴鹿委員】 「安心」や「安全」という要素が希薄である。当たり前のことかもしれないが、世界情勢などが変化してきている中で、「京都にはつながりがあるから、安心」ということは一つのキーワードになるのではないだろうか。ネットのつながりの中で交流が済んでしまうようになって、やはり京都は顔と顔を合わせる地元の関わりが強く、町内会なども残っている。自治も根付いており、他都市に比べてそれによる安心というものがあるのではないか。 <第4回審議会(2/3)> 【松井委員】 - 未来共創チーム会議の意見を読ませてもらって、「しなやかさ」とか、「人の強さ」、「生きる強さ」とか、「包容力」という言葉が浮かんできた。いろんなことを乗り越えていく、守っていくために必要なことだと感じた。 <第5回審議会(3/19)> 【牧委員】 - 被災すると、被災者や被災企業と呼ばれたりして、支援が必要な状態になる。そうなったときに、元に戻るような仕組みをどう作っていくのが重要。価値観として「普通の暮らし」ができるということはどう守っていくのが重要。この「普通の暮らし」が、京都は他の都市とは違う、いろんな「京都らしさ」がついてくる。 - このまちが好きだと言っていたことが「立ち直るしなやかさ」の観点で、とても重要である。

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
第二節	歴史と文化を介して人間性を回復できるまち	(1) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける	＜第3回審議会(12/10)＞ 【鈴鹿委員】 - 文化の面については、過去の歴史が新たな未来につながっていくという観点は興味深い。<u>市民が持つ独特の美的感覚や暮らしの知恵</u>などがある。「<u>京都の誇り</u>」は、個々が属している文化に誇りを持つことにもつながってくと思うので、それが<u>日常にあること</u>を、分かりやすい形で提示されたら良い。 【濱崎委員】 - 町家という暮らしの空間・時間の中から生まれた文化が、いわゆる「伝統文化」になっている。そういう意味で、この数十年で生活空間にどのような変化があり、どのような取組をみんなで一生懸命に頑張ってきたのか、また、これから私たちの暮らしは、どのように紡いでいくのかということを考えることに大きな意味がある。少し高尚に見えつつある「文化」との接点が、暮らしの中にあり、現代においては、京都にいるからこそ体感できている部分がある。だからこそ、<u>京都の人たちは、「文化」と日常との間をつなぎ、まだ次代へとつなぐ接点としての役割がある。</u> 【堀場委員】 <u>良い意味で外と馴染んでいく。外に対してアピールする</u>ということが重要であり、「京都市民は、京都は」とだけ言っていると、京都の中では良いが、特に日本の中で良くないと思う。むしろ、海外の人のほうが京都に対する誤解は少ない。 - 海外の文化を否定しているわけでも、敵対する趣旨でもない。よく理解することが大切で、盲目的になるべきではないということが、私が強調するスピリットである。事実、事業をしても、そのスピリットに海外の人が惚れてくれる。やはり信念を持つ、動じない、<u>文化的自信を持っている</u>ということが基軸となっていることが重要。 【松井委員】 - 伝統文化といわれている多くのものを手掛ける方々は、おそらく、それだけでは生活していけないが、伝統を守らなければという想いで一生懸命活動されて、そこから更に多様に派生して活動を広げていらっしゃる。<u>伝統文化の継承とは、技術だけではなく、理念や理想の継承</u>なのだと感じた。つまり、京都で守っていかなければならないものはそういった、理念や理想ということ。 【宗田会長】 - 東西だけではなく、北と南の関係も変わってほしいと思う。その時に交流するような何か規範的なものがあるとすれば、それは京都から生まれるかもしれないという可能性を秘めていると思う。 - 誇りが内向きであった背景には、町並みが汚かったり、京都が混乱したりという過去もあったと思うが、それがかなり改善されて、素直に、<u>外部の人が京都はいいなと憧れてくれるようなまちになってきている。</u>今度は、それをいかしたうえで、京都が新しい公共を含む、人間の在り方に関してどういう提言ができるかという議論に発展させていくための手掛かりになる。 - 町家があるから京都は偉大なのではなく、今生きている人が、そこにある<u>伝統工芸を大切に、これまでを大切に</u>する気持ち、スタンス、哲学、理念があるから、町家の住民もそれをつないでいこう、さらにそれを紡いでいこうという姿勢がある。それが、京都らしいということ。 <u>世界のことを結構意識するのが京都人の特質で、世界最先端の知見を持ち寄って、京都の景観政策、都市計画、福祉政策などに相当取り組んでいるので、まさに世界都市としての京都。</u> ＜第4回審議会(2/3)＞ 【赤松委員】 <u>スタートをデザインする</u>ということは、大学のまち、芸術、創造的、クリエイティブをめざす人々を育てる、つまり、<u>はっきりした出口が見えないことを学問として取り組もうとする人材を豊かに生み出すことに</u>関わり、つながる部分である。 【原委員】 - 京都に住んで、来て、働いて良かったと、全ての方が良かったと思うには、<u>心に余裕を持っていた</u>ことが必要。 ＜第5回審議会(3/19)＞ 【杉田委員】 - 近所でも最近よく見かけるが、アーティスト・イン・レジデンスの取組。マストツーリズムで、浄土寺エリアも銀閣寺が近く、これから桜の時期となるため、多数の観光客が来られる。<u>観光客が、ただ消費、見て帰るだけではなく、レジデンスという形で、もう少し中長期で滞在をして、地域の方々と関わる、学生さんに何かレクチャーをして帰っていただく、何かしら地域に置き土産をして帰っていただけるような仕組みをつくっている。</u> 【鈴鹿委員】 - 京都市民全体で見たとき、文化ということを掲げると、興味はあるけれども、少し高尚で、自分たちには関係ないと思ってしまふ方もいる。<u>そのような方の割合が結構高いのではないかと思います。ただ私が思うのは、そのような方々こそ、京都で暮らしている中で、文化に触れている機会</u>は実は知らないうちにたくさんあり、<u>自身の生活に京都そのものが浸透している。</u> 【松井委員】 - 意識はしていないが、過去を守って守られてきた空気感。<u>文化に淡く関わっている、あるいは日常生活のすぐ横にそれがある感覚</u>だけれど、それが京都人の<u>雰囲気</u>を作り出してきた。それを守りたいからだと思った。守り、伸ばし、接しているうちに新しいアイデアが生まれ、創造につながっていくということ。平時は意識していないが、一読してもらうことによって、私も京都人であると思いを持ってもらえれば良い。 【宗田会長】 - 多様な文化の交流が生まれる前提として、<u>市民一人一人が好きで取り組んでいる点</u>がある。 - 例えば祇園祭がよい例だが、宵山にしろ、巡行にしろ、おみこしにしろ、あれだけ皆さん一生懸命やっているだけに、祇園祭にあれだけ人があふれても、誰もオーバーツーリズムとは言わない。お祭りに来ているだけだと。本来は、<u>神社や仏閣、街並みなどがあり、お客さんがあれだけ来てくれることを、京都の人々が心から喜べるような状況に近づけていかなければいけない。そのため</u>には高屋委員発言の「好きだからやっている」というキーワードはとても大事。 - 世界中、ヴェネツィアやフィレンツェ、パリなども歴史都市だが、オーバーツーリズムは起こっている。それは都市の責任ではなく、たまたま世界の人類の寿命が延びて、所得が増えて、余生で何をするかというときに観光という文化交流を求めているということ。そういう面も含めて、<u>外国との文化の交流が生まれる、その交流を地域、市民の居場所、出番として演出していけるのか</u>ということが、議論として求められるのだと思う。

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
第二節	歴史と文化を介して人間性を回復できるまち	(2) 本物(ほんまもん)を追究・創造し続ける	＜第3回審議会(12/10)＞ 【曾我副会長】 - 生成AIは明らかに大きな分野になるのは間違いなく、そういう状況において、教育を今のような在り方で継続したとき、25年後に仕事はあるのだろうかと思う。技術の進歩について、少し後ろ向きに記載されている気がする。しかし、<u>技術の進歩は止めようもないし、止めるべきでもないだろうし、それに対応することが必要ではないだろうか。</u> - 経済もデジタル化を生かさなかったら成長しない。京都のまちの問題に、大学卒業後に京都から流出してしまう問題があるが、生成AI等の技術は、大学や、学問を学んできた人間が、きちんとそれを生かせる仕事だ。そのため、デジタル化などについて、あまりネガティブなことばかりを書くよりは、<u>そういうものが経済の中心になってくることを生かしつつ、それにどのように対応するのかを記載することが必要</u> - デジタル化が個人主義的傾向を強くしているというよりは、個別化された情報が取られていく時代。<u>個別化された情報が取られていく時代に対して、どのように対応するのか</u>という問題は大きいのではないか。 【田中委員】 - デジタル化が個人主義的傾向を強化していると言い切るのは少し違うのではないか。デジタル化も一つの要因ではあるだろうが、時代の流れや、核家族化、単身世帯の増加などの要因もあるため、それだけではないと思う。 ＜第4回審議会(2/3)＞ 【安保副会長】 - 未来共創チーム会議の意見のうち、「<u>ベストではなくベター</u>」ということは、様々な価値観の中で言われていることだが、ベストを求める競争が激しい中で、京都市のビジョンとして、その価値観でやっていこうとされている。どうしても一定の年齢になると、そう言って良いのだろうか、と思ってしまうのだが、若い世代は、<u>そうじゃないと京都らしさや市民が幸せで生きていけないという価値判断があるのか</u>、というところにすごさを感じた。 【小川委員】 - 未来共創チーム会議の意見を聞いたとき、基本的には共感するものの、革新的なデジタルネイティブならではのガツガツさはないと感じたが、<u>発想そのものが全く異なるイノベーションの在り方や未来の発展のさせ方があるのでは</u>と感じた。その意味で、責任感や主体性の概念自体が問い直されるべきだと思う。 【鈴鹿委員】 - 京都の老舗の集まりである「百味会」の新年会では、いつもそうだが、大きく利益伸ばすのではなく、それぞれの店のやり方を今年も守っていきましょうね」と挨拶される。一見すごく消極的に思えるが、そこにいる方々は日々、常に何をしたら続けていけるかを考えている。それを独自に考えて、自分たちで守ろうということが各々にあるというのが、まさに京都的な在り方で、<u>京都の市民もそういうふうに分たちで考えてきて動いてきたからこそ、まちづくりも独特に育ってきたのではない</u>かと思う。一人一人、自分サイズの幸せと1000年先を見ることは、一見すると相反するように見えるが、<u>自分たちの幸せを追求していくことが、結果的に1000年先につながると</u>思うので、その部分を対立なものとして見るのではなく、日々のところを見て、そして1000年先を見る。未来共創チーム会議の意見にもあったように、<u>地図を描くのではなくコンパスを標す</u>ということはそういうことではないか。来年どうしようとか、25年先をどうしようではなく、<u>1000年先にこうしたいから、その中で柔軟な部分、余白を作るのが大事だ</u>と感じていた。 【プラー委員】 - 来日したのはバブルが崩壊した頃。それまでずっと頑張って、経済的にも発展してきた日本だったが、そういうことではない、<u>ベストだけでないベターを認めることが、これからの日本社会にとっても重要。</u> ＜第5回審議会(3/19)＞ 【小川委員】 - 京都は関係人口も多いので、ファンダム・エコノミーという語弊もあるかもしれないが、<u>ある種の京都ファンに投資してもらって仕掛けいくつも考えられるのではない</u>かと思う。 - 古くからの街並みや京都人らしさといったものを維持しつつ、しかし新しいものを受け入れて上手に発展していく、京都ならではの考え方、方法のようなものを、「バージョン2.0」のように上手に言い表すことができれば、<u>市民の皆さんも「そういうふうにして欲しいな」</u>と思うのではないか。 【曾我副会長】 - 経済は基本的に資本主義というか、お金が絡むところで成長が起こる。もちろん成長には分配の問題や経済活動自体が抱える問題があり、それも考慮しなければならないが、一方で、<u>経済活動が伴わないと人々の暮らしが成り立たないのも事実</u>である。そのような中で京都はポテンシャルがある。基本的に今成長し得るようなところは、ハイエンドなサービス業といわれているような、人々が求めているものをつくり出していくこと、あるいは製造業でも非常に高度な製造業である。<u>京都は製造業も強いし、大学も含めてクリエイティビティがある人が多い。京都が頑張らないと日本の経済が立ち行かない。</u> 【田中委員】 - 例えば、企業誘致。「大阪にオフィスがあるから、京都には別にオフィスをつくらなくてもいい」と言われることもある。大阪にオフィスがあるのに、わざわざ京都にもつくる意義を説明できるようになりたい。説明できない自分がもどかしい。<u>長期ビジョンを見て「京都にオフィスを建てたいな」につながるよう、経済と雇用の話は長期ビジョンの中に入れたほうが良い</u>

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
第二節	歴史と文化を介して人間性を回復できるまち	(3) 支え合いの中で日々の生活を営める	＜第3回審議会(12/10)＞ 【鈴鹿委員】 - 子育て世代の目線からの意見であるが、「子ども」についての要素が薄いと感じている。やはり<u>未来を見据えたときに、「子ども」に関する内容をどこかに盛り込むべきではないか。</u> 【高屋委員】 - 福祉の世界は特にそうだが、人口減少が進む中で<u>支える側の高齢化が進行し、そうした人が一生懸命やっているのが現実なので、支え、盛り上げようと頑張っている市民の姿を、未来のビジョンに落とし込んでいただきたい。</u> 【福富委員】 「構造的暴力」に言及していただいていることは大変良い。暮らしづらさの背景には、社会構造の問題がある。ソーシャルワークの考え方では、社会構造自体に如何にアプローチしていくかが重要だといわれている。干渉と予防に尽力していった先、すなわち構造的なゆがみや、暴力が徐々になくなっていった先に安心がある。<u>普通に暮らせることが実は幸せで、それが私たちの、福祉の目指しているもの。</u>人や職業等によって様々な違いがあると思うが、まずそういうところから排除されずに、その人としてきちんと暮らしていけることを目指すという辺りまで書いていただきたい。 - ケアする中で癒やされるなどという相互作用的なものがあるので、<u>ケアする、されるという関係性の中に一体的な何かが起こっている。</u> ＜第4回審議会(2/3)＞ 【安保副会長】 「ケア」については、高齢者もどんどん増えていくので、<u>高齢者にも必要。</u>お互いに力のある人だけでなく、<u>全ての方々が京都で暮らしを確立していくには、ケアの思想をいつも持っていないと厳しいことがよく分かった</u> 【福富委員】 - 我々、福祉の立場からすると、支えがないから弱く追い込まれてしまうと感じている。支えを作ることで、追い込まれる人を少なくする取組は必要だが、この先に素晴らしい社会システムができて、社会から排除される人がいなくなるというユートピアのような社会が作れるかという、今後も新しい課題は起こり続けるだろうと思う。その時に、<u>ひとつのキーワードとして「余白」が出てきたが、これが大事になる可能性はある。</u> ＜第5回審議会(3/19)＞ 【安保副会長】 - 大人が次世代を育てることについて惜しいと思っていることは重要なのではないだろうか。様々な子育て施策を見て、<u>他都市と比べて京都は劣っていないがアピールが足りないし、市民に実感されていない。</u>今後の論点とするとき、市民に伝わっていないことが大きな課題だと感じた。 【田中委員】 - 市民よりも観光客をメインに考えられている状態が、少しずつ目に入るようになってきている。ライフステージを考えた時に、<u>京都市で子育てしていくとなった時に、本当に幸せに暮らしていけるのか、不安が強くなってきていると感じる。</u> 【福富委員】 <u>弱い人達が強いというのが京都。</u>水平社ができたのも京都だし、日本最初の盲学校が設置されたのも京都。認知症の人と家族の会も京都発祥、男性介護者と支援者の全国ネットワークも京都から始まった。<u>いろんな人のつながりがあって、普通の暮らしがあるが、その中で弱い人達が実は強いということが見えてくれば良い。</u> 【藤野委員】 <u>持続可能な社会の実現を見据えた場合、これからの25年、生殖、出生、育児などケアの視点がとりわけ重要視されなければならない。</u>近代社会では、こうした視点がしばしば影のごとく、不可視化されてきた。だからこそ、企業等が利潤を追求でき、経済成長してきた側面もある。しかし、今後、持続可能な社会を目指し、ケアの視点を重要視するならば、<u>社会の在り方自体が相当変わらないといけない。</u>ラトウーシュは、<u>脱成長という言葉で「成長をゼロにしろ」と言っているわけではない。「利潤追求の体制を問い直す」という意味で使っていると思われる。</u>ケアを重視しなければ、<u>持続可能な社会にはなりえない。</u>現状に対しては危機感をもっており、<u>言葉に拘るつもりはないが、その点はメッセージに入れるべきと考える。</u> 【宗田会長】 - 孤独化、一人暮らしが増えてくる。一人でもつながりを持ちながら生きていけ、同時にそれがケアされる。<u>企業や地域コミュニティにそれを担ってもらい、プラスアルファとなる新しい仕組みを考えていかないといけない。</u>それを文化や芸術の力でどう京都らしさを追求するのか、それをうまく示せば人類にとっての新たな解決方法となる。

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
第三節	自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち	(1) 多層的でゆるやかなつながりが続く	<第3回審議会(12/10)> 【榊田委員】 ・ どれだけデジタル化が進展しようとも、人間中心であり続けること、すなわち人と人との関係性をいかに充実させていくのかということ。そして、多様性を伴うような社会構造の変化。つまり、<u>多様な人々が、居心地がいいと思えるようなまちをどうやってつくっていくのかということ。</u> 【曾我副会長】 ・ 政治、行政の側が抱えている問題として特に大きいと思うのは、今も既に現れている<u>分断化や分極化が、今後も、さらに強まることだ。</u>京都において、そういうものと無縁であり続けられるなどということはない。 【原委員】 ・ 京都の良さというか、住んでいるところの良さは、やはり<u>住みやすさや働きやすさがあってこそ</u>だと思う。やはりコミュニティというか、<u>いろいろな固まりが大事。</u> 【宗田会長】 ・ コミュニティ防災とよくいうが、<u>コミュニティが自分を守ってくれるのではなくて、自分がそのコミュニティを支え、守る側に立とうとすることによって、コミュニティの一員たり得るような、自立性こそ、いわゆる人間性を恢復することにもつながる</u>ということだと思う。 ・ デジタル化をどう捉えるかということは、いろいろ考えるべき時期にきている。新聞を読まなくなっている、活字を読まなくなっていると御発言があったが、若い人とどうコミュニケーションするかということも考える必要があるだろう。このことは、長期ビジョンを、どう市民にお伝えしていくかという問題とも関わる。 ・ 働き方の問題は、現在急速に見直されようとしており、<u>京都のまちに暮らすことが、働き方を充実させるための大きな一歩になるかもしれない</u>という京都らしさも追求していきたい。 <第4回審議会(2/3)> 【小川委員】 ・ ある種のハイコンテクス性や曖昧性、空気感をもっと全面的に再評価していくことで、様々なことが突破できるのではと強く感じた。というのも、自分の主体性をぶつけ合い、激しく意見を言い合うコミュニケーションが成功しているかという、新たな争いを生んでおり、必ずしもそうでもない。静かなるコミュニケーション、ハイコンテクストなものがビジネスの世界でも評価されつつある。例えば、IT業界で成功している方々も、実はコミュニケーションが得意ではないなど。余白や間など、相手からの働きかけを呼び込むことや、<u>新しいものを受け入れる隙間を持ちながら、察するコミュニケーションが新しい未来を拓く可能性</u>なのではないか。 【宗田会長】 ・ <u>余白を残したけれど、余白に取り残された人がいることもある。なので、気を付けないといけ</u>ない。新型コロナウイルス感染症が蔓延した時でも、すべての人に目を配る難しさがつくづく分かった。人のつながりや社会と家族の在り方を考えさせられた5年間。余白をいろんな意味で考える機会になる。 <第5回審議会(3/19)> 【安保副会長】 ・ 子どもたちが地域の公園等で長い時間遊んだりして過ごすことができない生活になっている中で、<u>コミュニティと交流を子どもたちが求めているのなら、京都のコミュニティを維持していくには、行政としてとても工夫がいる</u>ところだろう。 【阪部委員】 ・ 京都のコミュニティスペースは、管理されている方がこだわりを持って運営されており、ルールがきちんとしていて、それを守ってほしいという思いが前面に出ている。管理者の方も最初の頃は、他所者に対する距離感があるが、1年、2年と借りて、信頼関係や人間関係が構築されてくると、とても親切に話をしてくださったりして、それが大阪や神戸にはないと思っている。<u>そのような地域のコミュニティが京都のよさで、それがまだ失われていない。</u>そういったものを大事にしていけるようなビジョンは大切だと感じている。 【曾我副会長】 ・ お金だけで社会が動くわけではない。コミュニティのようにお金は絡まないけれど、人と人とがつながって活動があるということは重要だ。お互いに知っている、同じ関心がある人たちだけが結びついている状態を、もっと広げてつなげていけないかと思う。<u>社会的な活動を媒介することで今までとは違うところのつながりを作っていく新しい仕組みを作っていく</u>いけない。京都はつながりが強い歴史があるが、それだけに頼ってはいられないほど流動的になっている。<u>深いつながりには入っていけないが、自分の活動だけをしていて良いとも思っていない人と関わらせるきっかけになる。</u> 【高屋委員】 ・ 私はどっぴりと町内や地域に浸かっているわけだが、近所で「あんた、好きで盆やってるんやね」と言われる。確かに好きでやっているが、<u>「好きでやってるんやね」と嫌味たらしく言う人の裏には、地域のことを考えて私たちがいろいろなことを世話していることを分かってくれている。</u> 【牧委員】 ・ <u>地域コミュニティによる支援が必要なときと、必要でないときがあり、そのことを踏まえて、どう地域コミュニティの維持を考えるかが重要</u>であると考える。 【宗田会長】 ・ 旧浄土寺村には大文字保存会がある。お盆のお寺の行事であることもあり、父と長男で取り組まれていたが、<u>だんだん家族の関わり方が変わってきたことも含めて、様々な年代の方が好きでやっている。柔軟に変化しつつ好きなことを続けているという、京都の市民感情、人柄、まさに市民目線が広がっていくと面白い。</u> ・ <u>京都には地域を離れたお祭りや芸事、習い事、商売の関係でつながるという人間関係、組織の関わり方が二重三重にもある。</u>こういう場でお会いすると、近所の人がこういうことしているのだと知ることができて、安心して声をかけてもらえたりする。そういう一種のセーフティネットが多様に積み重なっている。地域と離れても暮らしていける時でも、京都なら関わっていける可能性がある。 ・ 「<u>わたしたち京都市民</u>」で好きだからやってもらう社会的な仕組みを作らないといけない。

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
第三節	自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち	(2)「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる	＜第3回審議会(12/10)＞ 【田中委員】 ・ キーワードとして少し少ないと感じたのは、子育てや教育、学びの多様化のようなところだ。学びや教育が今後どのようにになっていくのかということは、ぜひ盛り込んでほしい。産業の発展や経済の部分についても書かれていることが少ない。 ＜第4回審議会(2/3)＞ 【赤松委員】 ・ 公立や国立の美術館、企業のギャラリーも増えているので、大学での教育だけでなく、社会教育の様々な価値観を見て、新たな刺激を受けることや、社会の人たちが大学に入っていくことで学生たちが育てられる、刺激が受けられるような今までとは違う大学の在り方が生まれてくるのではないかと。生涯ずっと学び続けられるまちとしての京都は、今後もずっと魅力になるのではないかと。 【鈴鹿委員】 ・ 京都で育っている人は、小さいころからその世界に入っている。何となく心に染み渡っているところがある。それが全てではないので、そういう京都の心を、どうする方法があるかわからないが、教育の面でできるということは、これから大事だと感じる。 【堀場委員】 ・ 仕事柄、7～8割が海外の仕事であり、働いている人も7割近くが外国人。そこで大事なことは、知識もそうだがどれだけ知恵を持っているか。あるいはクリエイティビティというか、独創力を持っているかどうか勝負になってきている。日本が相対的に弱くなっているのは、「クイズ王」ばかり育てて、いわゆる知恵を出す人を育てる教育になっていない。 ・ 海外の人をマネージして、なぜロイヤリティがついてくるのかと思ったときに、一番感じるのは、自分が小中学校で、京都のまちや四季、山とか川とか含めて、我々が小さい頃はそういう良さを学校で習った時の感覚、いわゆるプライドを持っていると、彼らはそれに憧れを持ってくる、ついてくるということ。彼らを京都に連れてきたときには、単なるビジネスだけではなく、京都の食文化やお花、お茶、お寺など見るが、京都は総合力が圧倒的。フランスの経済界との会合で、私は日本側の議長だったが、フランス側の議長から「パリもフランスも京都には勝てない」と言わせたと喜んだ。京都の多様性は非常に大きな価値があると思っている。しかし、京都にいてという良さに意外と気付かない。そういうことを系統立てて学んでいくことも大切。特に小中学校の子どもたちに、将来の京都を託していけるような教育をきっちりしていくことが大事ではないか。 【宗田会長】 ・ 子どもたちに感じてもらって、体験してもらってということが重要になる。それは、新しい教育に対する課題でもあり、世界と我々がどうコミュニケーションしていくかの問題提起でもある。 ＜第5回審議会(3/19)＞ 【藤野委員】 ・ この先25年間となると、企業の大半は日本的な雇用システムからジョブ型雇用に移っているだろう。今、およそ2割の大企業は既にジョブ型雇用に移っていると言われている。ジョブ型雇用に移っていくと、外部労働市場が発達してくるため、転職も活発になり、リ・スキリングが不可欠になってくる。そのような意味で、大学機関の多い京都には優位性があり、このまちに多くの人々がリ・スキリングで訪れる可能性もある。もちろんオンラインでということもあるだろうが、京都と関係する人たちが増えるのではないかと考えている。生涯学べる環境、いつでも学べる環境というのが京都というまちの一つの強みなのではないだろうか。
		(3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える	＜第3回審議会(12/10)＞ 【阪部委員】 ・ 西洋的なDEIやこれまでの流れを踏まえたうえで、ダイバーシティという言葉やそういう項目として扱わずに、京都らしさのところで書いていこうという方針をお示しいただいたことに大変共感できる。日々、様々なLGBTQの課題に関わっている中で感じるのは、西洋的な価値観を特に前面に押し出し過ぎていて、社会が分断していたりするところが、京都らしさとあまり相いれない点。そういう意味で、「人の在り方を尊重し合いながら」のような表現は、すごく優しくて良い。ただ一方で、可視化という意味では、もう少し踏み込んだ表現も何らか必要かと思っており、その辺りのバランスが難しい。 【プラー委員】 ・ 京都人のプライドや、京都人の誇りなどを前面に出している。伝統を守っていくことに加え、その人間的なつながりをとても大切にされるという、第三節の中に書かれていることは、とても良いことだ。外国人にとっても、大好きな京都。京都が大好きな外国人は多く、その人たちがどうしたら暮らしやすくなるのかということ、入れていただければ。 【牧委員】 ・ 何か大変な目に私が遭ったとしても、一人きりで頑張るだけではなく、周りの助けも受けながら回復できるのだというようなニュアンスがもう少しあっても良い。 ＜第4回審議会(3/19)＞ 【プラー委員】 ・ 一人一人のウェルビーイングは、個々が幸せであれば、全員が幸せになるということで好きな言葉である。 ＜第5回審議会(3/19)＞ 【プラー委員】 ・ 海外から来た目線では、海外の人にとって理解できない、理解しにくいものをどのように伝えていけば良いかが、大きな課題であり、大きなチャレンジであると思う。押し付けることはもちろんする必要はないが、京都らしさをどのように知っていただくかが大事ではないかと思った。自分も参加しよう、自分も関わろう、自分も関係を持とうと思っていたらけるとより良いのではないかと。

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第五章 わたしたち京都市民のこれから

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
			＜第3回審議会(12/10)＞ 【安保副会長】 ・京都市民が、これは自分たちの未来を書かれていると思えるものである必要があると思う。昔でいう洛中の方や、それから洛外に住む方、社会で活動している方も、これは自分のことをいわれていると思えるようなものだ。 ・構造的に社会の周辺に張り付けられてしまっている人たちも多い。京都といえども、そういう社会の構造的な問題については、どうしても影響を受けざるを得ない。そういう方々にとっても、自分たちも市民であって、長期ビジョンの価値観と一緒に共有できる幅広いものであってほしい。 ・どうしても大人しかイメージできないが、子どもも、教育されるだけの受け身ではなく、子どもは子どもの生活について主体的に参加できる、まだ社会で主流ではない若い人も参加できるなど、そういう京都の多層性の記載もあってほしい。そういうことができれば、私たちのビジョンという形で捉えることができ、子どもたちや若い人と話す時など、いろいろな場で活用できるものになる。 【榊田委員】 ・自分たちのまちは自分たちが一番責任を追っているのだという自治の概念をもう少し強く盛り込んでいただきたい。そして、ステークホルダーとしての行政、市民、そしてまちの個性になる企業。それぞれ立場が違う構成員がきちんと連携する、距離を縮めるという関係性が、長期ビジョンの中に現れると良い。 【杉田委員】 ・私の周りでも、例えば二拠点、もしくは多拠点という形で京都に関わりを持ち始める方や、海外から毎年京都を訪れる方もいらっしゃる。従来の考え方では、住民票があり、市民権があり、投票権があるというところで市民が定義されるのかもしれないが、ライフスタイルが多様化した今、様々な形で市民の在り方、京都への関わり方がある。 【曾我副会長】 ・人々がどういう形で公共的なものに対して関わっていくのか、その時に分極化してしまうのか、それともまとまっていけるのかという問題について、記載があっても良い。 【田中委員】 ・私は京都出身ではないので、過去、現在の情報量が少ないが、「みんなで作ってきたまちなのだ、後から住んでいる自分たちも、その一員になるのだ」というようなところは、理解しやすい。 ・京都出身で京都に住んでいる中高生が、第四章「京都のこれから」の部分を読んだ時に、学生たちがこれからどういうことができるだろうかと考えられるきっかけになる。また、京都のことをいいなと思っている人が長期ビジョンを読めば、自分がここに住んだり、京都に関わったりしたときに、ワクワクするような自分の未来があるなと思えるものになると、すごく良い。 【福富委員】 ・歴史や過去の様々なものの積み重ねから今の暮らしがあるけれども、これから先、一人一人が周りのために何かをすることで次の社会が形成されていくのだとしたら、「私」という主体それぞれに責任があるということを示すことが必要。 【プラー委員】 ・外国籍で長く日本に住んでいる人は、「国民」や「市民」という言葉に、自分が入れているのか、入れられていないのかが気になっている。「国民」ということになると、少し違和感があるが、「市民」という言葉になると、自分も含まれていると感じる。 【牧委員】 ・全て「私」が主体になるということは、災害から復興するにしても、安全・安心を確保するにしても、誰かがやってくれるのではなくて、「私」が何かしなければならぬということになり、最初は少し厳しいスタンスだと感じた。しかし、災害復興にせよ、安心・安全なまちづくりにせよ、一人一人が強くなり、きちんとやらなければ実現は難しい。無責任に社会はこうしなければいけないなどと言ってしまわないところに、厳しさも感じながらもかえって妥当なのではないか。 【松井委員】 ・その場その場で、どうやって柔軟に対応していくのかということを考えながら、自分たちの責任を果たしていく、役割を果たしていくということが重要である。そうしたとき、基本的なビジョンがあれば、自分たちが何かやらなければいけない時に、目指す方向が明確であることで、将来何か大きな問題が起きた際にも、それを見返すことによって、自らの行動の規範とすることができる。

これまでの審議会における御意見について(長期ビジョン(仮称)本文第四章及び第五章との紐づけ)

第五章 わたしたち京都市民のこれから

長期ビジョン(仮称)本文案			審議会委員の御意見
節		小見出し	
			＜第4回審議会(2/3)＞ 【安保副会長】 - 京都市は市民の生活を支える責任があるが、市民の生活は、<u>すごく雑多である。雑多なところをきちんと支えられないと、市民の生活は続けられないところがある。</u> 【榊田委員】 - 市長中心ではなく、いろんな階層の人が、いろいろなテーマに対して、意見、提案をして、それを市政に取り上げていけるような仕組みを何か作ると、他のまちには無いことができるのではないかと。 - 生涯、国のため、市のために貢献するのが生きがいとを感じるには、<u>すべて行政でやってしまうのではなく、市民の方が半分ボランティア、半分ワークという形でまちづくりに参加する。そういうことをもっともっとやっていったら、「0.1市民」という言葉、全ての人が市民意識を持つということが、まちづくりにつながっていくきっかけになるのではと思う。</u> 【阪部委員】 - 私自身は住民票を置いたことはないが、大学は同志社大学で、この会場のすぐ近くで、懐かしさを感じた。そういった私のように、私の認識では自分は0.5市民くらいに感じているが、<u>大学が京都だったとか、仕事で京都に関わっていたとか、そういった人たちも巻き込んで、自分事として何らかの形で関わりを作っていけるということはすごくいい</u>と思った。それが他にはない京都らしさにつながると思う。 【曾我副会長】 - 現時点でこうだと決めつけずに、今後もずっと決めていく、対話していくという仕組みをどう作るのかが大事。広い意味での政治になるだろうが、いろんな対立や共通部分もある人達が、<u>どういう形でこの京都の在り方を考えていけるのか、そういう仕組みを作っていけるのかどうか。京都市という単位ではなく、もっと狭い単位で、そこにいろんな人たちが入っていく、市民参加の在り方。審議会のような形で選ばれた人たちではなくて、いろんな人が入って考えていくミニパブリックスのような場を設けていくのかということとセットで、オープンにして今後も考えていく。そこには対立もあるし、共通部分もある中で、どう方向性を見出していくかという仕組みが必要になってくる。</u> 【宗田会長】 - これまでの25年、あるいは50年、戦後の80年、京都は落ち着いてきた。<u>1000年先の超長期目線で考えられるほど豊かになってきた。脱成長と表現されるようなゆとりができてきた。</u>若い方が恵まれていると思っているかは別かもしれないが、その恵まれた環境をどう生かし、世界のために貢献できるか。決して京都だけが良ければ、ということではない。 - 市民参加の仕組みについては、京都でも30年近く前に市民参加推進条例を制定して、基本計画策定に当たって100人委員会を設置するなど、わりと進んできた。<u>市民として関わる以外にも、例えば、全国各地に散らばっている茶道や華道をされている方たちも、京都に定期的に来てくださっている。そういう方たちが膨大な数がいらっしやり、京都とつながっていて、京都の文化を全国に広めていってくれている。そういう方たちは、京都との関わりが結構あり、京都の関係人口として、京都を支えている部分も多い。</u>その最たるものがお茶、お花、絵画、音楽などの芸術分野だったりする。 ＜第5回審議会(3/19)＞ 【杉田委員】 - 誰かにつくられたサービスやインフラをただ享受して消費しているだけではなく、<u>市民一人一人がそこに関わっている状況があるから、私はこのまちが好きだ</u>と思っている。 <u>消費ではなく生産ができるまち、与えられたインフラやサービスを消費するのではなく、積極的に関わる市民がいるまちが、これから必要になってくるのではないかと。</u> 【曾我副会長】 - 間接民主主義は今後25年で難しくなると思う。やはりネットなどでは特定の関心が増幅されることは止まらないし、<u>そこで生まれる分断も、今後もずっと続いていくのではないかと</u>思われる。日本も例外ではなく、様々な事実に基づかないような形での非常に攻撃的な活動などとも無縁ではない。実際にそういうことが起きているのは選挙である。選挙は一時的なお祭りのようなものなので、一時的に特定の関心が増幅したりする。 <u>デジタル化なくして多くの人が関わる政治は達成できないというのもまた事実なのだろうと思う。長期ビジョンの策定でも、特設サイトなどを設けているが、まだ意見聴取にとどまっており、議論までは至っていない。出来上がったビジョンをどう考えるのかという時に、デジタルを使いながらの参加のシステムをどう作るのか。</u> 【福富委員】 - 中京区役所では屋上を緑化し、そこで市民がホップを育てて収穫して、クラフトビールのbreweryに持ち込んでビールを作ったりしている。行政と市民の関係、<u>行政は基礎自治体として住民サービスを提供するだけではない付き合いがあるのが面白い。</u> 【原委員】 - 日本はもともと仏教国なので、檀家という仕組みがあり、お寺がある場所と違うところに住んでいても寄付をする。<u>京都に住まなくても、京都に携わった人が、京都が好きだからという緩いつながりでつながっている。そのような方たちをいかに活用していくかで、京都の未来が生まれてくるのではないかと</u>思っている。<u>温かく迎える都市だ</u>ということが重要。 【プラー委員】 - 私のような住民でも、国際交流に関係する会議や、百人委員会にも参加させてもらっていた。<u>自分の意見を出せる場をこれからも続けて欲しい。</u> 【松井委員】 - これからの25年は、人口構造も変化し、社会情勢にも柔軟に対応していく必要があるならば、<u>今25年間を具体的に詰めすぎるより、大きな方向性を共有し、その都度耕していく方が</u>良い。 【宗田会長】 - 自治体だからこそ市民参加を考えていかないといけないという点、この25年やその前の25年含めて、自治連合会による住民参加と、NPOなどの市民参加と2つあって、それをどうシフトというか、<u>協力し合いながら変化していくか</u>ということかと思う。 - インバウンドを通じて京都は外国人と接する機会が増え、あるいは先端企業で働く外国人も増えた。留学生なども加えて、京都はグローバル化の先端を行くようになった。最初は観光客として京都を訪れ、そのうちに留学生になり、エッセンシャルワーカーやIT企業で活躍するようになり、<u>外国籍の方の社会への関わり方も深くなっていく。その過程で京都をより深く理解され、様々な意見を述べるなど京都にコミットされていく</u>ということだと思う。 - 観光に来られるお客さんは、京都の文化財は国が守っていると思っている。しかし、市民、住民、お寺や保存会が守っているのは、京都はみんな分かっている。主体性も京都の特徴のひとつ。クラウドファンディングが集まるのも京都の関係人口の多さから。<u>好きだからやっていることが、市民の自発性であり、ウェルビーイングでいう、体の健康、心の健康、そして社会的な関わりを持つことであり、ソーシャルウェルビーイングとなる。</u>